

科学研究費補助金基盤研究（C）「近代化模索期の『国史』編纂と地図作成―赤門書庫旧蔵地図の研究」、東京大学史料編纂所画像史料解析センター「赤門書庫旧蔵地図」プロジェクトでは、旧赤門書庫に収蔵されてきた地図類の目録化と検討を進めている。ここに収めた諸論考は、二〇一三年三月一日行った公開研究集会「海図と歴史」での報告内容に、その後の調査内容を付加して、まとめ直したものである。

両研究代表者／杉本 史子

近世から近代へ―海図が語る歴史

私たちの研究グループが、赤門書庫旧蔵地図と命名して目録作成作業を続けている史料群のなかには、十九世紀なかばから後半にかけて作製・印刷された海図が豊富に残されている。



図1 「東京湾図」（赤門書庫旧蔵地図5-3-1-2、東京大学史料編纂所蔵、140.2×90.2センチメートル、横須賀付近）この海図では、水深は漢数字で表記されている。

この時期の日本が対峙したのは、一八二〇年代から海洋測量と海図作成・出版体制を整えたイギリス海軍水路局を中心として、各国水路局が情報交換する体制の整った西洋世界であった⁽¹⁾。このような状況の中で、江戸幕府体制下では、十九世紀半ば、近世に生み出された海路情報の全国的集積（一八四二年水深測量令、水戸藩『皇国海岸図』など）が行われた。また幕府は、西洋軍制・測量術の導入を図り、一八六二年には日本全体の水路測量も企図する。しかしこの動きは一旦中断した。新政府の元で、一八七一年海軍に水路局が設置され、再び独自測量・海図作成が目ざされた。一八七〇年代には、日本による測量網と英国による測量網が、日本を二重に取り囲んでいた⁽²⁾。明治以降の海図は、日本の国民国家および帝国形成と不可分に結びついて作成・複写・使用されていった。日本沿岸測量よりも新たに支配下に置いた台湾や朝鮮の水路調査・海図作成が優先されたのである⁽³⁾。

同時に、個々の海図には、近世から近代への変動期の中、従来の社会編成や空間や時間のとらえかたまで覆されるような状況の中で、新しい

杉本 史子

考え方や発想と格闘する人々の痕跡が残されている。

(1) 「1は一間なり」——空間に書かれた数字——

たとえば特定の事物が何も記述されない海中の任意の場所に数字が記されること(図1)の意味から解説する必要があった。近世の絵図では、事物と事物のあいだの空間を数理的に図示することは必ずしも一般的ではなかった。描く主題は事物であり、事物と事物のあいだは空際にすぎなかった。一八六一年(文久元)幕府軍艦操練所スタツフの測量に基づき「東京湾図」(赤門書庫旧蔵地図⑤⁽¹⁾)の凡例には、「海面浅深ヲ記ス処、一二三ノ数字ヲ以テ、幾何(いくばく)間ト云テ、示ス」とあり、「海面」に記された漢数字が、何間という水深を表す事が述べられている。

測量に採用した「ものさし」についても解説する必要があった。近世の日本では、長さの「ものさし」は公定されておらず、使用する集団や目的により複数の「ものさし」が使われていた。諸種の尺には、最大約一、三ミリメートルの差が存在していた。⁽²⁾「東京湾図」では、一間とは、複数のものさしのなかの曲尺の六尺を意味することが記述されている。

また、文久二年の幕府軍艦操練所スタツフの測量に基づき、慶応元年作図された海図の写と考えられる「尾勢志海岸実測図」⁽³⁾は、水深表記にアラビア数字が使われ、「一者、一間也」と、「1」が「一間」を表していることから説明されている。明治初期の陸上の地押測量の技術者達はアラビア数字を覚えるのに苦心したと伝えられているが、同様の事情が海の測量でも存在していたと考えられる。そして、「1者、一間半、即一間参尺也」と記されており、間のゼロ以下には分数表示が採用されていることが説明されている。これは英国海図にならったものと考えられる。分数表示を、使い慣れた一間〓六尺に換算することで理解させる必

要があった。

(2) 「アフター神武」——国外に向いた年号表記——

海図は、世界的規模での水路情報共有体制のなかにあった。いわば、実務と密着した存在であると同時に、国外向けの顔でもあった。そのことが海図に独自の表現を与えたと思われる点がある。年号表記である。近代国家の建築にあたって、政府は暦法・時刻法・年号表記といった、生活全体に関わる時間の表示方法についてもドラスティックに改変した。一八七二年(明治五)十一月九日太陽暦が採用され、同十五日には、日本書記の神武即位年を紀元と定められた。いわゆる皇紀である。この皇紀は、一般的にはあまり使用されず、公式書類はほとんど元号のみが使用された。⁽⁴⁾しかし、海図にはこの皇紀の使用が散見される。たとえば、赤門書庫旧蔵地図②352「武蔵国横浜湾」(「JAPAN TOKIYO GULF YOKOHAMA BAY」)⁽⁵⁾には、「Tokyo published at the Hydrographic office of the admiralty Ninth month 23th 2534 after Jimmu Great Japan」と、刊行年をafter Jimmu Great Japanと記述している。一方日本語では、「皇明治六年測量」と記している。

ここに収めた講演記録と論考は、こうした変動期の痕跡を残す海図の具体像を生き生きと描き出している。これまで、歴史研究ではほとんど取り上げられることのなかった海図が、実は、他の史料には残されにくい歴史の具体相を克明に表現するものであることを、それらは物語っている。

〔注〕

(1) 横山伊徳「一九世紀日本近海測量について」(黒田日出男・メアリ〓エ

リザベスⅡベリ・杉本史子『地図と絵図の政治文化史』東京大学出版会、二〇〇一年)

(2) 前掲・横山論文

(3) 山室信一「空間認識の視角と空間生産」(山室信一責任編集『岩波講座「帝国」日本の学知 第八巻』二〇〇六年)

(4) 鈴木純子「幕府海軍から海軍水路部へ―赤門書庫旧蔵地図に残る初期海図の軌跡」(『東京大学史料編纂所研究紀要』二三三、二〇一三年)

(5) 佐藤賢一「ものさしの近世的統一」(杉本他編『絵図学入門』東京大学出版会、二〇一一年)

(6) 前掲・鈴木論文

(7) 陸地測量部の研究誌『三交会誌』掲載記事による(山岡光治『地図をつくった男たち 明治の地図の物語』株式会社原書房、二〇一二年)

(8) 岡田芳郎「日本における暦の変遷」(『歴史評論』四三〇、一九八六年)

本研究は、JSPS科研費24520737の助成を受けたものです。